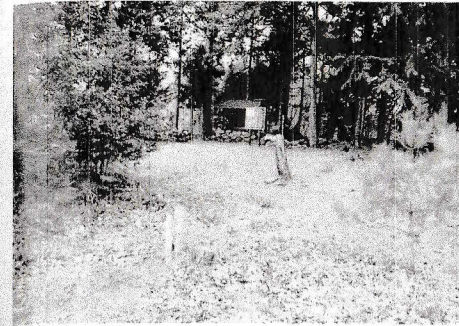


二、信濃守護として安定した基盤を作りかけていた小笠原政康が亡くなると、再び信濃の国は動乱の時代になっていった。政康の死後、政康の子の宗康と政康の甥の持長が小笠原家惣領職を巡って争うようになった。

幕府は宗康の相続を認めたが、持長はそれを不満として戦いを起こした。宗康は伊那を本拠にし、持長は府中とのつながりが強かった。文安三年（一四四六）、宗康は惣領職と全所領を弟の光康に譲り、持長と決戦を始めた。初めは宗康が優勢であったが、後の管領畠山持国のつく持長の勢いが強くなり、とうとう宗康は敗れてしまった。これにより、小笠原氏は府中小笠原と伊那小笠原とに分裂し、一族の統一さえできぬまま守護としての力も衰え、信濃の国内は乱世となっていた。

小笠原氏はかりでなく、諏訪氏と高遠氏の内紛も起きていた。こうした内乱は、応仁の乱の影響が地方にも広がっていった現れといつてよい。諏訪や伊那地方もその影響があったと思われる、片切氏や大草氏がこうした中



船山城 東端の主郭 写真の奥手は船山稲荷神社 東から西へ撮影

でどのように小笠原氏や諏訪氏と接触していたかは定かではないが、何らかの関わりがあったのではないかと思われる。

四 『諏訪御符札之古書』にみられる片切氏と大草香坂氏

『諏訪御符札之古書』は、文安三年（一四四六）から延徳元年（一四八九）までの四四年間にわたる諏訪神社上社の祭事四月花会・五月会・御射山祭の頭役に奉仕した信濃の武士の様子を記録したもので、当時の信濃の国の武士の盛衰を知る上で貴重な史料とも言える。片切氏や大草香坂氏について見てみると、次のようである。

長禄二年戊寅花会（一四五八）

一 前宮 片切式部丞頼為、御符之札一貫八百文、頭役拾五貫文、此年十二月廿一日死去ニヨリ御符ヲ神長預申、札一貫文越候

長禄二年戊寅五月会（一四五八）

一 左頭 大草民部少輔宗政、御符之札四貫五百文、御頭役二拾貫文寛正七年丙戌五月会（一四六六）

一 左頭 大草、香坂左衛門有宗、御符之札三貫八百文、使二部五郎、頭役一拾貫

応仁三年己丑花会（一四六九）

一 磯並 片切兵庫頭光為、御符札一貫八百文、使弥五郎、頭役二拾貫

文明四年壬辰五月会明年御頭足（一四七七）

一 右頭 大草沙弥昌広、御符札三貫三百、以上使三郎、路銭多仕候て、下宮へ三郎落候、下宮四郎二郎大夫余二申候間、三郎

即帰候

文明八年丙申明年花会御頭足（一四七六）

一 宮頭 片切民部大輔光為、御符札一貫八百、使孫十郎、頭役二拾貫

文明九年丁酉五月会明年御頭足（一四七七）

一 左頭 大草、香坂左衛門佐有宗、御符札三貫三百三十三代百、此使弥五郎・源十郎、庚戌年可当と被申候、頭役二拾貫

文明十四年壬寅花会御頭明年（一四八二）

一 宮頭 片切、民部大輔光為、御符札一貫八百、使弥五郎、頭役二拾貫

文明十四年壬寅五月会沙（一四八二）

一 左頭 大草、入道時弥昌広、御符札三貫三百、使弥五郎、頭役二拾貫

文明十九年丁未五月会明年御頭足（一四八七）

一 左頭 大草、入道時弥昌広、御符札三貫三百三十三文、鹿皮一文、使弥五郎、頭役二拾貫

長享二年戊申花会明年御頭足（一四八八）

一 宮頭 片切源為慎、御符札二貫百三十六文、代初、使弥五郎、頭役二十貫

（『新編信濃史料叢書』第2巻）

『諏訪御符札之古書』を見ると、当時の大草氏や片切氏の祭祀への勤仕の様子をうかがうことができる。頭役は祭祀の責任者で、いろいろな特権が与えられていた。重科もなく、鎌倉番役も免除されていた。

その分、御家人にとつては重い勤役であった。五月会の頭役は、左頭・右頭・流鏑馬の三方に分かれ、御射山祭は左頭・右頭の二方に、花会は宮頭・御堂・磯並・前宮の四頭があった。頭役は主要な國人を頭本として、これに従う村々を集め頭役に勤仕した。田数八〇町を標準として組が作られたようである。使いの三郎が路銭を落としてしまったエピソードや当時の争いごとなども記されていて、時の動きも知ることができる。

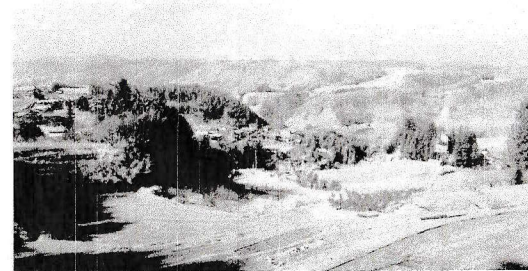
る。天正一九年（一五九二）、「信州伊奈青表紙之繩帳」には大草の内の「宮地之郷」とあり、また村所蔵の古文書に、同年一月「宮地分御検地之帳」（高約六百三拾七石）とある。この一帯は上宮外県神社を中心に関が進んだものと思われる。

外県神社に残された文書（神社書上帳）によると、村の歴史はおおよそ次のようである。

健御名方命が出雲の国から逃れて来て、諏訪の地に留った時のことである。大草の里に「大久延健男」という里長がいた。この男は、武勇をもつて聞えが高かつた故に、健御名方命が訪ねて、共に狩狼を楽しんだという。その機に鳥獸を多く捕獲でき、大変喜んだ健御名方命はこの地に祠を造り、この地を宮地と定めた。

その後、神功皇后一九年（三四〇）、大久延健男の子孫五百彦が祠を建立して健御名方神を祭り、上宮外県神社と称したと伝えられる。

今もこの付近に宮地と呼ぶ小字名が残る。神社は、かつては大草全域の氏子で維持された。社名の「外県」とは、中世の諏訪社の内県（諏訪の



宮地 東より西を写す 中央右の森は上宮外県神社

内）に対する外県（外の諏訪）を意味しているという。

大草郷の代表的な村を二つ取り上げたが、このほかにも陣馬形や大嶺の山塊を取り囲むように麓には日曾利・丸尾・谷田・間柱・鹿養・桑原・四徳の村が生まれ、そこでの生活が営まれていた。

三 大草郷の諸族

（一）香坂氏・大草氏

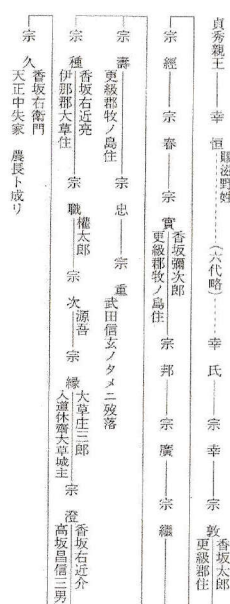
南北朝時代から室町時代にかけて、北信・東信に香坂氏・滋野氏一族があり、一族は津・望月・海野・香坂などに分かれていた。香坂氏の本拠地は更級郡の牧城（信州新町）で、北信を中心に勢力を張っていた。一方、南信の伊那郡には同族の香坂高宗がいて、大河原（大鹿村）を中心に活躍していた。

この伊那郡における香坂氏の研究は、市村威人の「大草休庵に就いて」「伊那史壇」につぎるといってよい。まず、氏の研究の中から、中世の香坂氏に關係したか所の大要を拾うと次のようである。

①大草の高坂家所蔵の香坂系図によると、「滋野幸氏十五世、宗次の子宗縁は通称を大草庄三郎といい、入道して休庵と號し、大草に住す」とある。一説によると、同所の深沢に臨んだ台地の突端（全古城）に大草城を築き、その郭と堀池などは今も現存している。休庵は、その居住地の地名に因んで「大草」を名乗ったと言われる。

②この休庵は下條頼安あてに伊那谷の諸族と共に起請文を出しているが、休庵の家中衆の諸士が大島・市田の各村に散在していたと考察

坂系図を載せている。



大草氏

市村説では、香坂氏と大草氏を明確に区分して論じられないが、各種の史料の中で「大草」姓が散見される。例えば「諏訪御符札之古書」を取り上げてみると、次のように「香坂」と「大草」は区別しているようにもとれる。

長祿二年	大草民部少輔宗政
寛正七年	大草香坂左衛門有宗
文明四年	大草沙弥昌廣
文明九年	大草香坂左衛門佐有宗
文明十四年	大草入道時沙弥昌廣
文明十九年	大草入道時沙弥昌廣

また、香坂氏系図の中に大草次郎大夫経純・大草弥太郎らの名が見られる。これらのことから、「大草」を「香坂」とは別の一族と理解することも可能である。

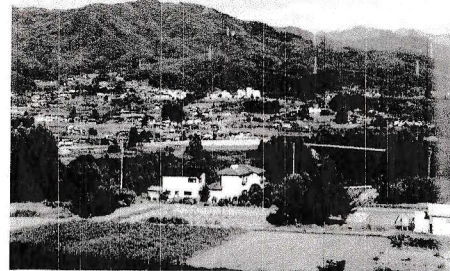
仮に「諏訪御符札之古書」と「香坂系図」より大草氏を整理した系

されることから、休庵は単なる一土豪にとどまらず、付近一帯におけるあなどりがたい一勢力であったことがわかる。

③香坂系図には宗綱の第二子宗種、永享の結城合戦の功により大草郷地頭を賜うとあるが、香坂氏の大草土着（居住）はそれより前の南北朝時代と考えられる。それは大河原・鹿塩・大草の三か村は、古来、大草郷と称せられる一郷のうちに包括されたからである。

④香坂系図に、「休庵の子宗澄、宗澄の孫宗久に至り、天正年間に、家を失ひ、大草村の農長（郷士）となる」とある。また大草の常泉寺に、慶長六年（一六〇二）七月、香坂何右衛門昌吉の出した寄進状があり、下久堅村の平沢家、大下條村の金田家に、慶長六年以後元和初年（一六一五）までの間に香坂七郎右衛門署名の年貢割付状または皆済目録が残っている。七郎右衛門が当時の飯田城主小笠原秀政の家臣であったことは確かである。香坂七郎右衛門・香坂何右衛門の世系は明らかでない。

大要は以上のようなのであるが、また、氏は研究の最後に参考として香



大草郷遠望 対岸の片桐から撮影

図が次である。



香坂氏と大草氏 今までの研究では、香坂高宗と大草城の關係、大草氏の出自（でどころ）、大草氏と香坂氏の關係など、いま一つはつきりしない面があった。それは地元に残された史料が少ないことが最大の理由であるが、研究の中心が宗良親王と香坂高宗におかれた面も否定できない。

ここで、大草郷の開発当初の鎌倉時代から、約四〇〇年間の中世の時代を①鎌倉・南北朝時代②室町時代③戦国時代に三分して考えてみたい。これについては、まだまだ検討の余地が多いが、現時点での一つの試案として。

①鎌倉・南北朝時代 陣馬形の西麓や南麓の谷地部や丘陵部には縄文時代から奈良・平安時代にかけての遺跡が点在していて、すでに村が発生していたことは確かである。そうした村が次第にまとまり大きな村となり、そこで中心となった指導者が大草氏と考えられる。大草氏の屋敷の場所については、位置や地形、前時代の遺物の出土の状況などから考えると、堂ヶ原・垣外畑（東小学校）か、その南の御北（沖田）の丘陵が有力と思われる。

南北朝時代になると、大草原が信濃における南朝方（官方）の拠点となるが、当然西の玄関口である小波の谷の入口をかためる必要がある。

つた。そこで、大草城が築かれたものと思われる。その城の守りの中心となったのが香坂氏で、恐らく香坂高宗の直系が同族の一人がついたであろう。

この時代（南北朝時代）の大草郷の地頭は大草氏で、香坂氏との關係はまだそれほど強いものではなく、盟友關係に近いものであったと考えられる。

②室町時代 南北朝時代が終わると、香坂氏はその拠点を山深い大草原の地から天竜川沿岸の生産性の高い大草へ移し、大草城とその城下の整備に努める。現在、大草城址から出土する膨大な量の遺物は、この時期のものである。

一方で、香坂氏は大草氏と血縁關係となることで、势力的な基盤はより強固なものとなった。ほぼ同族になったとも考えられる。香坂系図によれば、例えば香坂宗継の母は大草次郎大夫経純の女であり、香坂宗職の母は大草弥太郎の女とある。

また、前述した「諏訪御符礼之古書」によると、頭役を大草郷で務めているが、十五世紀後半の約三〇年間に大草氏と香坂氏が交互に勤め、両勢力はほぼ互角であったと推察される。

③戦国時代 香坂・大草の両氏は、ほぼ一つの勢力にまとまったと考えられる。香坂系図によれば、香坂宗縁は「永正四年（一五〇七）大草館に生まれ、母は大草弥太郎の女で、大草・香坂の両家を相続する」とある。また、宗縁は大草庄三郎とも、大草休斎とも称している。

その後の香坂氏は、史料からはしばらく見られなくなる。

（二）香坂氏に属した武士

古書や言い伝えによれば、承久の昔、飯島城主飯島太郎が北条の命を受けて京都へ向かった時、それに従ったものに飯島十騎があり、ほかに大島十騎・片切十騎・大草七騎があったという。この大草七騎は、香坂・桃澤・宮澤・塩澤・日曾利・安田・加曾畑・黒路であったという（二騎多い）。